

ラバーリーの花婿用袋

袋(標本番号H238243、高さ/45cm 幅/26cm)

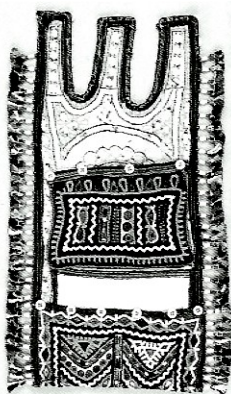
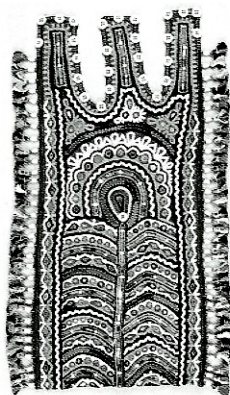
上羽 陽子(うえば ようこ)

本館文化資源研究センター

この袋は、インド西部のグジャラート州カッチ地方で、ラクダやヤギなどの牧畜を業とするラバーリーの人のひとによって作られたものである。ラバーリーの女性たちはさまざまななかたちのガラスミラーを縫い付ける技法で、衣裳や調度品などを作っている。この袋に表現されている文様は、豊穡を意味するマンゴーの木である。色とりどりの刺繍糸を用いて、丸形、菱形、涙形、長方形といったさまざまなかたちに削って整えたガラスミラーが縫い付けられている。よく見てみるとひとつのガラスミラーを付ける刺繍糸が途中で他の色糸に変えられており、巧みに考え抜かれた色彩構成で文様が表現されていることがわかる。また、袋の両端には、ピースと糸を束ねた房が丁寧に縫い付けられている。

このようにして作られた袋は、花婿によって使用される。花婿は、結婚儀礼の前に、

親戚や近所の招待客へピンロウジを配る。ピンロウジはスバリと現地ではばれる、ヤ



シ科のピンロウの種子で、キンマの葉、石灰と一緒に嚙む嗜好品である。このピンロウ

ジは、結婚などあらたな人間関係や社会的な契約の成立の際に交換される。この袋は結婚儀礼のとき、花婿がそのピンロウジを入れておくものである。

結婚儀礼の最中、花婿はこの袋を介添人に預ける。袋を預けられたということは、花婿にとつてもつとも心を許せる人ということになる。

インド西部には現在でも、このような女性たちの手仕事に継承されている。この袋は、昨年収集されたインド西部の刺繍布三六〇点のうち的一点である。今秋から春まで開催される企画展「インド刺繍布のきらめきーパシン・コレクション」に見る手仕事の「世界」のなかで、約一〇〇点の刺繍布とともに披露目される。ぜひ、この袋を身近で見て、インド西部の女性たちの手仕事の世界を感じて欲しい。